

日本中央競馬会美浦トレーニング・センター競走馬診療所の業務

田嶋義男[†] (JRA 美浦トレーニング・センター競走馬診療所長)



1 はじめに

日本中央競馬会 (JRA) は、毎週、全国10カ所にある競馬場のどこかで競馬を開催し、年間288日スポーツエンターテインメントとしての競馬をお客様に提供している。競馬に出走する競走馬は、平常は東西2つのトレーニング・

センター (図1) に所属する調教師のもと集団管理され、土・日の競馬開催の際は競馬場に馬運車で輸送され出走することになる。トレーニング・センターは競走馬の供給基地となっており、その広大な敷地には様々な調教馬場や競走馬診療所などの設備が備えられ、それぞれ常時2,000頭を超える競走馬が在厩し、日々トレーニングを続けている。

トレーニング・センターに在厩する競走馬の診療は、JRA 競走馬診療所および開業獣医師が担当している。JRA 競走馬診療所は総合病院、開業獣医師はホームドクターとしての役割を果たしながら、2,000頭を超える馬の診療を協力して行っている。また、JRA 競走馬診療所は競走馬の診療の他に、競馬の主催者として公正確保に重要な役割を担っている。診療機関として見た場合は、トレーニング・センターに在厩するサラブレッド競走馬だけを診療対象とし、また、約50名規模のスタッフで運営される動物の診療施設は、日本国内でも類を見ないものと言える。

ここでは、茨城県美浦村にある美浦トレーニング・センター競走馬診療所 (図2) で行われている診療業務を中心に、競走馬の保健衛生向上、競馬の公正確保・円滑な施行のために実施している業務を紹介したい。

2 競走馬診療所の業務・組織

競走馬診療所は、①日常の各種疾病や調教・競走によって発症する運動器疾患などの診断・治療、②伝染病の予防や蔓延防止のための防疫、③出走の適否を判断する馬体検査、④禁止薬物の不正使用防止とその指導、⑤装蹄業務の実施および装蹄技術の向上・普及、⑥調教・飼養管理に関するコンサルタントならびに保健衛生思想の



図1 美浦トレーニング・センターの全景。競走馬診療所は、南北2つの馬場のほぼ中間地点に位置する



図2 競走馬診療所中央のアーケード、往診車が並ぶ

普及など、幅広い業務を受けもっており、競走馬の健康増進と競馬の公正確保に大きく貢献している。

競走馬診療所の組織は、管理課・診療課・検査課・防疫課の4課からなり、約50名の職員 (獣医師26名・装蹄師7名・診療助手・診療事務) で構成されている。各課毎に事務分担は規定されているものの、日常診療、外科手術、検査・診断、防疫などの実務は、課の枠を超えてスタッフ全員あるいはチームで対応している。また、競走馬診療所には装蹄職員が配属され、一般装蹄のほか、X線による肢軸検査、特殊装蹄による装蹄療法など獣医師と共同で蹄の病気に対応できる体制になっている

[†] 連絡責任者：田嶋義男 (日本中央競馬会美浦トレーニング・センター競走馬診療所)

〒300-0493 稲敷郡美浦村大字美駒2500-2

☎0298-85-2111 FAX 0298-85-2009

E-mail : yoshio_tajima@jra.go.jp



図3 競走馬診療所の施設内にある装蹄室



図5 輸送性肺炎馬に対する気管支鏡による気管支肺胞洗浄 (BAL)



図4 医療情報管理システム (JARIS)



図6 関節鏡視下での骨片摘出術

(図3)。

JRA 職員の仕事は、「二足の^{わらし}草鞋」と言われる。その理由は、ウィークデイにはそれぞれのセクションで「平常業務」、土・日の競馬開催日には競馬場などに赴き「開催業務」に携わるからである。まず始めに、一足目の草鞋である「平常業務」診療業務について説明したい。

3 診療時間と診療概況

競走馬診療所の診療時間は、一般診療が9:00～17:00まで(水曜から日曜)、休診日(月・火曜)は9:00～17:00まで当番対応、それ以外の時間帯は急患当番が携帯電話で依頼を受け対応する。当診療所は、24時間、365日の急患診療体制を整えており、夜間の緊急手術にも対応している。

また、在籍するすべての競走馬の医療情報は、医療情報管理システム (JARIS) (図4) によって集中管理され、全国の競馬場やトレーニング・センターの競走馬診療所で参照できる。これによって、競馬開催に伴い馬が

移動しても十分な診療体制を整えることが可能となる。ある意味では人医療より充実しているかもしれない。

当診療所における平成20年の診療概況は、診療実頭数が7,022頭、診療延頭数は49,899頭であった。また、発生実頭数は5,697頭であり、病類別では運動器疾患が最も多く64.7%を占め、続いて消化器疾患9.3%、呼吸器疾患8.9%、損傷6.2%、皮膚疾患6.0%の順であった。装蹄業務は、装削蹄及び一般・特殊処置が延4,067頭、装蹄療法が延1,108頭であった。

4 日常診療

精神的にも肉体的にもハードなトレーニングを課せられている競走馬は、様々な疾病を発症する。代表的な疾病としては、職業病ともいふべき骨折・屈腱炎・靭帯炎などの運動器疾患、感冒・輸送熱・気管支炎などの呼吸器疾患がある。その他にも疝痛などの消化器疾患、創傷性角膜炎などの眼科疾患、皮膚疾患などがある。当診療所では疾病を発症した競走馬に対し検査・診断・治療を行い、競走への早期復帰に努めている。また、日常の健



図7 全自動血液分析装置が導入された検査室。昨年の血液検査件数は、10,728件



図8 早朝5:00(夏季)からの調教監視。事故馬救護と出走診断などの業務を担当

健康管理、疾病の予防するため、飼養管理法や調教方法に関する指導も行っている。

当診療所の基本的な診療スタイルは、診療車を使った厩舎での往診になる。一方、物理療法(電気鍼・SSP・マイクロレーダーやレーザー治療など)や大型の検査・診断機器(内視鏡・気管支鏡・エコーなど)を使用する診療は来診で行っている。また、手術馬や肺炎などに罹患した重症馬は入院させ治療している(図5)。

5 外科手術

近年、馬の外科手術は麻酔技術の進歩とともに飛躍的に進歩した。これにより、以前では救えなかった病気からの救命や、故障により引退を余儀なくされた競走馬の競走復帰を可能とした。通常、馬の外科手術は全身麻酔下で実施される。代表的なものは下肢部の骨折に対する手術で、関節鏡を用いた骨片摘出術(図6)と螺子固定術がある。また、急性腹症(疝痛)に対する開腹術、喘鳴症(喉頭片麻痺)に対する喉頭形成術、去勢術などを

エクイパイロットの構成

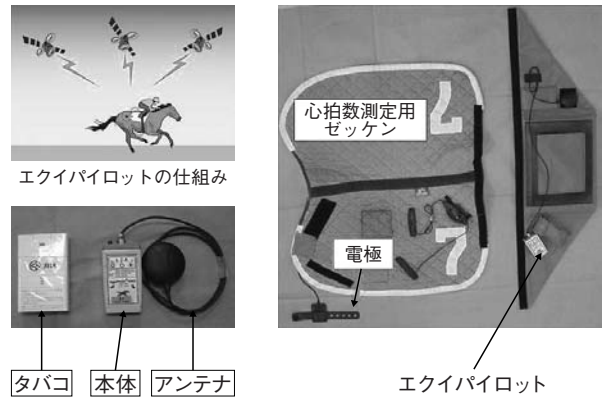


図9 競走馬の体力測定に使用するエクイパイロット



図10 牧場などJRAの施設以外から入厩するすべての馬に対し、専用の検疫厩舎に繋留して入厩検疫を実施。昨年の検疫頭数は、11,678頭

実施している。当診療所における2008年の総手術件数は137件で、内訳は、骨片摘出術91件、螺子固定術21件、上部気道手術9件、開腹術7件、去勢術4件、ヘルニア整復術1件、眼科手術1件、その他3件となっている。

6 検査・診断

当診療所は様々な医療機器を備え、日常の健康管理や各種疾病に対する検査・診断を行っている。主な検査には、運動器疾患に対するX線検査や超音波検査をはじめ、内視鏡検査、血液検査、眼科検査、心電図検査、寄生虫検査、トレッドミル検査などがある。病性鑑定を除くほとんどの検査に対応可能である。当診療所における平成20年度の検査総数は、20,711件であった(図7)。

私たちが診断と称しているものには、一般的にはあまり馴染みのないものがある。その一つが出走診断である。骨折などで長期間レースから遠ざかっていた馬などを対象に、レース出走の適否を追い切り調教を見て診断



図11 美浦トレーニング・センター周辺の民間牧場への視察



図12 競馬場の装鞍所における出走馬の馬体検査

する業務である。質の高い競走を提供するために重要な仕事となる(図8)。

また、放牧休養時診断も重要な仕事の一つである。在厩する2,000頭以上の馬の診療を当診療所がすべて実施しているわけではない。そこで、馬がトレーニング・センターから放牧に出る際に放牧休養時診断の受診を義務付け、在籍するすべての競走馬の病気の把握に努めている。

7 スポーツドクターとしての役割

競走馬診療所のスタッフは、競走馬の調教進度やコンディションを科学的に評価するスポーツドクターとしての役割も担っている。その一つとして、“エクイパイロット”(図9)による調教中心拍数の測定がある。エクイパイロットとはGPSを内蔵した心拍数測定装置で、心拍測定用センサーと一緒に競走馬に装着することで調教中の心拍数と走速度を測定することができる。私達は、エクイパイロットから得られたデータを解析し競走馬の心肺機能(V200・VHRmax)やコンディションを評価することで、厩舎関係者が調教方針を決める際の参考資料を提供している。また、期待した競走能力が発揮されずサブパフォーマンスを呈する競走馬については、トレッドミル上での内視鏡検査や炎症性気道疾患(IAD)検査を実施して呼吸器系に障害がないかを調べることで、臨床的に競走馬の呼吸循環機能を評価している。

8 防疫業務

2,000頭以上の競走馬を集団管理しているトレーニング・センターでは、一旦伝染病が侵入・発生した場合、急速に蔓延し、競馬の開催が中止になる可能性がある。このため以下のような防疫業務を実施している。

- ①JRAの施設以外から入厩する馬の伝染病をチェックする入厩検査(図10)

- ②全在厩馬に対する伝染病の定期検査(年2回)
- ③伝染病(馬インフルエンザ・日本脳炎・ゲタウイルス感染症・破傷風・馬鼻肺炎など)の発生・蔓延防止のための予防接種
- ④厩舎構内の消毒と害虫(ハエ・カ・アブなどの衛生昆虫)の駆除
- ⑤トレーニング・センター内における発熱馬の疫学調査・国内外の伝染病に関する情報の収集
- ⑥輸出検疫のための検査場所(農林水産大臣の指定を受けた施設)の管理

このような防疫措置を講じているにもかかわらず、平成19年8月に美浦トレーニング・センターにおいて日本国内では36年ぶりとなる馬インフルエンザの発生が確認された。前回、昭和46年から47年にかけての大流行の際は競馬開催を約2カ月間中止しており、この経験からワクチンの開発に取組み、全ての競走馬にワクチン摂取を義務付けてきた。その結果、今回の流行では競馬開催を1週間中止しただけで、被害を最小限に食い止めることができた。馬インフルエンザのトレーニング・センター内への侵入を阻止できなかったものの、ワクチン接種の重要性を改めて認識させられた。

また、美浦トレーニング・センターの周辺には多数の民間牧場があり、短期放牧馬や休養馬などの入れ替えが頻繁に行われている。トレーニング・センターの防疫のためには周辺牧場との協力体制が重要であり、広域にわたる馬衛生対策の推進に努めている(図11)。

9 競馬の開催業務

次に、二足目の草鞋「開催業務」については簡単に紹介する。「平常業務」としてトレーニング・センターで競走馬の診療に携わっているスタッフは、競馬開催時には全国各地の競馬場に出張し、開催業務に従事している。獣医職の執務分担としては、獣医委員、事故馬救護



図13 レース終了後、洗点眼のために競走馬診療所に来所する競走馬。眼に入った砂を洗い流し、創傷性角膜炎を予防する

係、馬体検査係、診療係などがあり、 Gondola・馬場内・装鞍所・検体採取所・競馬場競走馬診療所などで執務している（図12）。これらの業務は、公正かつ円滑な競馬を施行するうえで欠かすことのできない重要な任務である。

出張者で編成される競馬場の競走馬診療所は、野戦病院に例えられる。競馬で外傷を受けたり骨折を発症したりした馬は、そこで応急処置を受けてからトレーニング・センターに戻り、必要に応じて継続診療や手術などを受けることになる（図13）。

10 おわりに

私たちの競走馬診療所は、JRAの組織の一部として



図14 最先端の獣医技術への取り組み。屈腱炎の幹細胞移植治療のために胸骨から骨髓液を採取（競走馬総合研究所との共同研究）

様々な業務に取り組んでいる。なかでも診療業務はその根幹となるもので、最も重要な業務の一つと認識している。しかし、数年で繰り返される異動や臨床の現場で働ける期間がある程度限られていることから、技術の継承は大きな課題である。個人ではなく組織として獣医技術を維持・向上させねばならないと考えている（図14）。

JRAを取り巻く環境は厳しい状況が続いているが、競走馬診療所は、質の高い競走の提供に関する取組みや競馬の公正確保に関する取組みを通じて、競馬の発展や馬医療の向上に寄与したいと考えている。また、数少ない馬の臨床を経験できる場の一つとして、獣医学科の学生などを対象とした研修生を積極的に受け入れるなど技術普及に努めたい。